

できました。私達一同、心から感謝いたしております。

(3年 渡辺 勝江)

鹿島・那珂巡検

(式 先生)

昭和46年4月8日～10日

4月 8日 鹿島臨海工業地帯

9日 大洗海岸、那珂湊、久慈(日立)港

10日 水戸市

鹿島・那珂巡検は、鹿島神宮の近くの鹿島浄水場から始まった。この浄水場は、今回の巡検の大きな見学目的である鹿島臨海工業地帯の工業用水として、北浦からの水を揚げている。鹿島町は神宮や、多数の古墳からもわかる様に変古の町で、一帯に海岸砂丘が発達しているが、工業地域として開発される前は砂丘地帯の貧しい農漁民の生活は惨めなものであったという。鹿島の人口は現在約2.5万人であるが、隣接する神栖町、波崎町を合併して市にしようとする計画がある。このうち開発の中心は神栖町と鹿島町である。開発にあたっては、鹿島方式と称する農工両全政策が県知事により進められているが、用地買収によって移転した農家の昭和34年の抽出調査では、その30.4%が離農をして、貸家業、商店を営んでいる。又米作をやめて観葉植物や温室栽培(ピーマンのビニールハウス栽培など)に転業する農家も多い。工業地帯自体は製鉄を基幹産業とし、工場の敷地も1つ1つの建物も大変大規模であるのが、いかにも“鹿島臨海工業地帯、”という重厚なイメージであった。また、大工業地帯にはつきものの公害についても、その防止に巨額の投資をしているとはいえ、工業の規模が大きいだけに問題は大きいし、将来ますます深刻になってゆくものと思われる。付近の農漁民も、これまでの貧困からは一応解放されたとはいえ、こんどけ大気汚染の恐怖に悩まされなければならない。砂丘の微高地から眺めた鹿島の空は灰色にけむり、何か陰惨な重苦しさが感じられた。

2日目は、午前中に大洗海岸の白亜紀層の隆起波食台を観察し、那珂湊の第2漁業協同組合を見学、ここを根拠地とする遠洋漁業の実態や、組合の運営状況などについてのお話をうかがった。午後からは東海村の原子力研究所、および久慈(日立港)の見学。日立港は現在建設中の港で、日立工業地帯のための港である。沿岸流による砂州を切って埋立て、商港とする計画である。

3日目は水戸市内で地形を観察し、その後茨城県庁で茨城県の開発についての概観的なお話をうかがい、鹿島、那珂巡検のしめくくりとした。この巡検を通して、工業の開発とそれに真向から矛

盾する住民の安全で快適な生活というものへの配慮との釣合をどのようにしてとるか、を根本的に考えねばならない時期に来ているということを痛感した。 (4年 石田 真知子)

いわき市 (内藤先生)

昭和46年4月10日～12日

〔コース〕

- 10日 常磐共同火力発電所・名笏工業団地
- 11日 湯本温泉集落・常磐炭鉱磐城炭業所 小名浜港
- 12日 東京通商産業局平石炭支局 好間炭鉱閉山跡

一般産業・暖厨房向けは勿論、近年電力用としても石炭の需要は減少し、石炭産業の斜陽化が続いている。内藤先生の御指導で、私達が訪れたいわき市は、常磐炭田の中心で、昭和26年125,30年98を数えた炭鉱も、閉山を余儀なくされ、今では炭鉱を残すのみとなっていた。従って各町で暗い印象を受けたが、小名浜港だけは非鉄コンビナートとして日本一の規模を持ち、炭田地域とは対象的であった。次にテーマに沿って、巡検報告をしようと思う。

〔炭鉱の閉山に伴う地域社会の変容〕

常磐炭鉱磐城炭業所は、明治16年操業開始し年間200万tの採掘をしてきたが、最近の公害規制で高硫黄炭の為嫌われ、良質炭の減産も重なり経営不振で、昨年12月に閉山宣言を行なった。3853人の解雇者は、地元での再就職が難しく、約2000人は県外就職で、多くは君津市周辺の重工業の会社に行く。炭住からは2年以内の立ち退きを迫られている。

湯本は、86軒の旅館が立ち並ぶ温泉集落である。しかし、内湯ではなく、炭鉱の付属湯を使っている為、大きな打撃を受ける。昭和30年に、産炭地振興を主目的に設立された共同火力K.K.も石炭不足が問題となってきた。現在出力72万KW、260～70万t/年間消費炭で、石炭火力では日本一の規模を持ち、電力供給源として不可欠になったが、政府が48年迄しか一般炭の保証をしていない為、重油への燃料転換策が進められねばならない。これ等の影響を考慮して、5月8日から新会社が発足し、良質炭の産出西部炭は存続が決定した。

好間村は、古河系の好間炭鉱があったが、44年に閉山した。村の人は、35年から32%も減少したと言う。心地良い春風の中で荒廃した炭鉱施設や、ほとんど空屋となった炭住の真黒な光景や、残務処理にあたっている人々の御苦勞を見て、閉山に伴う周辺地域への影響の大きさを、一層